

森 鷗外 著「木精」 考

—— 子ども時代への訣別 ——

長 田 真 紀

I

森鷗外が明治四十三年（一九一〇）一月十六、十七日の両日にわたり「東京朝日新聞」に「橐吾野人」の筆名で発表した「木精」は、子どもの成長がもつ喪失と獲得の意味を格調高い文章で綴った短編小説である。鷗外の作品のなかではこれまであまり取り上げられることのなかった作品で、かねがね惜しいと思ってきた。

今日、日本の多くの子どもたちがおとなになることをどこかたたくに拒んではいないだろうか。子どもばかりではなく、青年を含むおとなまでもが自分自身の成熟や円熟を遠ざけようとするふしが、いたるところで見受けられる。本当の意味でおとなになることが困難なこの時代、本作品が示唆するところは極めて大きい。

本稿では、詩趣に富んだ寓話的なこの愛すべき作品の梗概を追いながら、考察を及ぼしてみたい。

II

ブロンドの髪をしたフランツという名の子どもは、巖が屏風のようにそびえている谷間にいつもやってきては、「羅馬法皇の宮廷へでも生捕られて行きさうな高音」で、「ハルロオ」と呼ぶのであった。

呼んでしまつてちいつとして待つてゐる。

暫くすると、大きい鈍いコントロールバスのやうな聲でハルロオと答へる。

これが木精である。

山や谷などで人間の発した声が反響してかえってくる「こだま」は、一般的にはひらがなで表記することが多いが、「笄」「木霊」「木魂」あるいは鷗外が本作品のタイトルとして表記したように「木精」とも記す。もともとは樹木の精霊の意味である。

古来、洋の東西を問わず、山を行く人々は、「こだま」を単なる音の反響現象ではなく、人間の呼びかけに答えてくれる人格化された聖なる存在として、つまり山や森に宿る樹木の精霊として、あるいはその精霊の声と考えていた。「山彦」も同様で、山に住む男性神もしくはその存在が人間に答える声であった。

本作品のフランツも、「木精」を確かにいつもそこにいる存在、生命をもったなものかである存在として、なんら疑念を差し挟むことなく信じている。

「呼ぶ」という行為は、一般的に、生命をもった対象を相手になされることが多く、「ハルロオ」⁽¹⁾という挨拶の言葉も本来ひとを対象に発せられる語である。

フランツはなんにも知らない。只暖かい野の朝、雲雀が飛び立つて鳴くやうに、冷たい草叢の夕、蝉が忍びやかに鳴く様に、こゝへ来てハルロオと呼ぶのである。併し木精の答へてくれるのが嬉しい。木精に答へて貰ふ爲めに呼ぶのではない。呼べば答へるのが当たり前である。日の明るく照つてゐる處に立つてゐれば、影が地に落ちる。地に影を落す爲めに立つてゐるのではない。立つてゐれば影が差すのが当たり前である。そしてその当たりの事が嬉しいのである。

漢詩文の対句表現を用いた「只暖かい野の朝、雲雀が飛び立つて鳴くやうに、冷たい草叢の夕、蝉が忍びやかに鳴く様に」は、鷗外の漢文の素養の高さと詩趣を如実に発揮した名文である。陽光のまばゆきあたたかな朝、夕露の降りた薄暗い草叢。朝・夕、暖・冷、の対比のなかで、雲雀の明澄な囀りと蝉のじっと心にしみこむような鳴き声が響く。明暗の視覚的描写のなか、聴覚的感興を醸し出す見事な文章である。

さて、フランツにとって巖の前で「ハルロオ」と呼び、「ハルロオ」と答えてもらうことは至極当然のことで、毎日巖の前に行って無心にその行為をしては心から喜んでいるのである。おとなになると、目前の効果を追ったり、それをするのがなんのためになるかを無意識のうちに考えているものである。けれどフランツはそれとはまだ無関係の子どもの心性にとどまっている。

フランツは「父が麓の町から始めて小さい沓を買つて来て穿かせてくれた時から」、つまり、ひとりで歩けるようになってから、いつも巖のところに来ていた。しかし、そのフランツも次第に大きくなり、「父の手傳をさせられるやうになつた。それで久しい間例の岩の前へ來ずにあた。」言うまでもなく、労働の責務を負うか否かはおとなと子どもとを分け隔てる社会的な境界線である。労働の手伝いをするのは、おと

なに近づいたことにほかならない。フランツの成長の確実な一歩がここにある。

ある朝、フランツは久しぶりに岩の前にやってきて、以前のように「ハルロオ」と呼んだ。しかしその声は、「少し荒^{きび}を帯びた次高音」になっていた。かつて少年聖歌隊にスカウトされそうなボーイソプラノであったフランツの声は、変声期をむかえテノールへと変わりつつある。まさに大人への肉体的な変化、身体的な成長である。

呼んでしまつて、ぢいつとして待つてゐる。

暫くしてもう木精が答へる頃だと思ふのに、山はひつそりしてなんにも聞えない。只深い深い谷川がごうゝと鳴つてゐるばかりである。

フランツは久しく木精と問答をしなかつたので、自分が時間の感じを誤つてゐるかと思つて、又暫くぢいつとして待つてゐた。

木精は矢張答へない。

フランツはぢいつとしていつまでもいつまでも待つてゐる。

木精はいつまでもいつまでも答へない。

これまでいつも答へた木精が、どうしても答へない筈はない。もしや木精は答へたのを、自分がどうかして聞かなかつたのではないかと思つた。

フランツは前より大きい聲をしてハルロオと呼んだ。

そして又ぢいつとして待つてゐる。

もう答へる筈だと思ふ時間が立つ。

山はひつそりしてゐて、ごうゝといふ谷川の音がするばかりである。

又前に待つた程の時間が立つ。

聞えるものは谷川の音ばかりである。

これまではフランツは只不思議だ不思議だと思つてゐたばかりであつたが、此時になつて急に何とも言へない程心細く寂しくなつた。譬へばこれまで自由に動かすことの出来た手足が、ふいと動かなくなつたやうな感じである。麻痺の感じである。麻痺は一部分の死である。死の息が始めてフランツの項に觸れたのである。

フランツはどんなに大きな声で呼んでも、そしてどんなに待つても、木精が答えてくれないことを訝しく思う。その直後、ある種の寂寥とともに自分のなかで何かが失われたことを感じとつた。木精が答えなくなったという変化が、実はフランツ自身の

なかに繋がるものであることをおぼろげながら察知している。

ひとは生まれた瞬間、今度は死へ向って決して後戻りできない人生をあゆみ続ける。成長は、一方では常に死を内包している。死を認識すること、そして自分もまたその死から免れないことを知ること、自分自身のなかの確実な死を自覚すること、こういった死を意識していく過程は、子どもがおとなへと成長していく重要な過程なのである。

暫くしてフランツは何か思ひ付いたといふやうな風で、「木精は死んだのだ」とつぶやいた。そしてぼんやり自分の住んである村の方へ引き返した。

木精が答えないことの原因を考えめぐねたフランツは、結局のところ「木精は死んだのだ」という答えを導き出す。

しかしフランツは、「木精は死んだのだ」と自分のなかで結論づけてはみたものの、やはり気になってしかたなく、同じ日の夕方、もう一度岩のところへ出掛けて行った。岩に近づくと不思議なことにあの木精の声が聞こえてくる。それは「小さい時から聞き馴れた、大きい、鈍い、コントロールバスのやうな」木精の声であった。思わず駆け出したフランツの目に入ってきたのは、例の岩のところに集まっている子どもの姿だった。人数は七人。皆ブリュネットの髪をした血色のよい丈夫そうな子どもである。見たこともない子どもだったので、フランツはそれ以上近寄ることもせず立ち止まったままその光景を見つめていた。

子供達は皆ちいつとして木精を聞いてゐたのであるが、木精の聲が止んでしまふと、又聲を揃へてハルロオと呼んだ。

勇ましい、底力のある聲である。

暫くすると木精が答へた。大きい大きい聲である。山々に響き谷々に響く。

空に聳えてゐる山々の巔は、此時あざやかな紅に染まる。そしてあちこちにある⁽³⁾樅の木立は次第に濃くなる鼠色に漬されて行く。

七人の知らぬ子供達は皆ちいつとして、木精の尻聲が微かになつて消えてしまふまで聞いてゐる。どの子の顔にも喜びの色が輝いてゐる。其色は生の色である。

そこで見たのは、かつての、子どもだったフランツと木精とのやりとりそのものであった。

子どもは、自然と自由に対話することができる。自然との交感はおとなより鋭敏でかつ豊かだ。子どもは自然の懐子である。自然に抱かれる安寧と幸福。自然が子どもに与える恩寵は、子どもがそれを無邪気に素直に受け入れるがゆえに、より深い。

群を離れて矢張りいつとして聞いてあるフランツが顔にも喜びが閃いた。それは木精の死なゝいことを知ったからである。

フランツは何と思つてか、その儘踵を旋らして、自分の住んでゐる村の方へ歸つた。

歩きながらフランツはこんな事を考へた。あの子供達はどこから來たのだらう。麓の方に新しい村が出來て、遠い國から海を渡つて來た人達がそこに住んでゐるといふことだ。あれはおほかたその村の子供達だらう。あれが呼ぶハルロオには木精が答へる。自分のハルロオに答へないので、木精が死んだと思つたのは、間違であつた。木精は死なゝい。併しもう自分は呼ぶことは廢さう。こん度呼んで見たら、答へるかも知れないが、もう廢さう。

闇が次第に低い處から高い處へ昇つて行つて、山々の巔は最後の光を見せて、とうゝ闇に包まれてしまつた。村の家にちらほら燈火が付き初めた。

子どもはいつまでも子どもではいられない。必ずや子ども時代は終わりを告げ、おとなとして成熟していかなければならない。その時ひとは、何かから拒絶されるという、試練を伴ったイニシエーションを通過しなければならない。それは、もう戻ることのできない子ども時代の時空を離れねばならないからである。

木精の沈黙。木精から応答を拒絶されたフランツは、当初言い知れぬ不安ととまどいを味わう。そしてその原因を相手の存在の消失とした。しかし今、七人の子どもと木精との対話を目のあたりにしたことによって、木精は嚴然とそこに存在していること、死んだのは木精ではなくてフランツ自身のなかの子どもであつたこと、そしてもはやフランツ自身は子どもではなくなつても、常にまた子どもというものが誕生しそこに存在し木精と「ハルロオ」と応答を交しあうことを、知つたのである。

おとなになるとほとんどの人間は、木精の声を聞くことができなくなるばかりか、かつては聞こえていたということも忘れ、聞こえなくなったことさえも気づかない。しかしフランツは、以前木精と対話したことを決して忘れなかつた。本当に木精が死んでしまったのかどうかを自分自身で確かめずにはいられなかつた。そしてもう一度

岩のところへ出かけて行った。だからこそ、本来であったらもう見られない（聞こえない）光景に遭遇できたのである。そしてそれは、フランツが自分自身の子ども時代の終焉に卒然と気づき得心する出来事となった。

ブロンドのフランツとは違い、ブリュネットの髪をした七人の子ども。フランツにとっては見知らぬ子どもであったが、「麓の方に新しい村が出来て、遠い國から海を渡つて来た人達がそこに住んでゐるといふことだ。あれはおほかたその村の子供達だらう。」と、考える。ここには、血縁、地縁とは無関係に、次世代を生きる子どもが確実に存在し続けるという、鷗外のコスモポリタンの思考が窺える。

「あれが呼ぶハルロオには木精が答へる。自分のハルロオに答へないので、木精が死んだと思つたのは、間違であつた。木精は死なない。併しもう自分は呼ぶことは廢さう。こんで呼んで見たら、答へるかも知れないが、もう廢さう。」フランツは万感の思いを込めて自分の子ども時代への訣別を爽やかに受け入れ、誇らかにおとなとしての出立を果たした。

III

子どもからおとなになることの精神的・肉体的変化。先に述べたように、成長は、常に死を内包しているわけだから、聞こえたものが聞こえなくなり、見られたものが見られなくなり、感じられたものが感じられなくなる、ということがある。すなわち喪失である。しかし、一方では、おとなになり、知識や技術を身につけることで蒙が啓かれ、経験や体験を積むことで、生きていく過程で出くわすさまざまな困難を乗り越えていく力が備わる。深い叡知や許容力を培うことができるのは、人格が成熟したおとなにこそ可能なことである。子ども時代とは違った耳、目、こころを持つていくことの意味は大きい。

子どもからおとなになることによって、失うものと得るものとは、実は、等価なのではないだろうか。

自然に包みこまれてその陽光のなかで溢れ出る生命力をほとぼしらせているのが子どもという存在ならば、陽光が消えて暗闇が覆った後、生きていくために家々で「燈火」を灯すのがおとなという存在だろう。フランツもまた、そのおとなの一員となったのである。

※「木精」の本文引用は原則として『鷗外全集』第六卷（一九八七年五月 第二刷発行 岩波書店）に拠った。但し、繰り返し記号を一部改めた。

注

- (1) これはドイツ語の「hallo」であると考えられる。しかしこの単語の発音は、英語の「hello」とほとんど同じになされる。「ハルロオ」と表記したのは、「ゲーテ」を「ギヨオテ」、「シラー」を「シルレル」と表記したのと同じようなものであろうか。
- (2) 鷗外が子どもの数を「七人」としたところは、グリム童話の「白雪姫」の七人の小人や、「狼と七匹の子やぎ」を想起させるような、いかにも寓話的雰囲気を醸し出す数字となっている。
- (3) 本作品には「樅の木立」の叙述がここも含め四箇所ある。

『ヨーロッパの森から ドイツ民俗誌』（谷口幸男ほか著 昭和五十六年八月 日本放送出版協会）によると、常緑樹である樅の木は、「万物蕭条として死と寒さと闇の支配する冬の世界にあって、希望と堅実さのシンボル」であるという。また、『ドイツのことばと文化事典』（小塩節著 一九九八年四月 第三刷発行 講談社学術文庫）によると、「冬にも緑を失わぬので、ゲルマン時代から神霊の宿る木として大切にされ」てきたという。なお両書とも、樅の木がクリスマスツリーに使われるほか、ドイツでは家の棟上式にも飾られることを指摘している。

次世代を生きる子どもはまさに希望の象徴であり、「木精」と応答を交わしあう光景にはふさわしい樹木である。

ここで、突然話が逸れることを許されたい。『国家の罨』（佐藤優著 平成十七年三月 新潮社）には、著者が獄舎で経験した樅の木に関わる次のような件がある。

囚人からの不満が多いので、しばらく経ったところで、外の廊下に観葉植物が置かれるようになった。確かにこれがあると心が和む。観葉植物は、ゴムの木ともみの木の鉢植えが交互に置かれていたが、九月にもみの木が撤去された。

そのとき隣人が、「先生、あの木はもう戻ってこないんですか」と淋しそうな声で尋ねていた。私ももみの木に情が移っていたので、その淋

しさがよくわかった。

この隣人は、確定死刑囚であった。獄舎の廊下から、「ゴムの木」ではなく「もみの木」の鉢植えが撤去されてしまったところに、隣人のまもなく訪れるであろう“未来”と、私のかなしみが暗示されているように思われる。